

【2011 東北・関東大震災被災地報告④支援の行方】

＜ボランティアについて —有益か迷惑か—＞



今回の震災を受けて、被災者の役に立ちたい社会の役に立ちたいという責任感と正義感に駆られている方は少なくないと思う。この震災発生直後から、ボランティア参加の問い合わせだけでなく、自衛隊志願者まで殺到したらしい。その一方で、ネット上では災害ボランティアとして行動を起こそうとする人に対して注意を促す情報発信が目立つ。

- ①食事や健康面で自分がお世話されてしまっている迷惑ボランティア
- ②自分探しや観光気分で規律がなく嫌な仕事は引き受けない旅人ボランティア
- ③独善的で身の程を知らず、被災者の役に立つことそのものよりも感謝・尊敬・注目されることが目的の自己満足ボランティア。

阪神大震災ではこうしたボランティアがよほど被災者の心を傷つけていたようだ。

被災地での経験では、何が出来るかは別として、自分の生活を越えて過酷な被災地に身を投げいれ、被災者の役に立とうとするボランティアを、**どの人もとも温かく応援してくれるし、存在そのものを希望として喜んでくれる。**もちろん**多くの地域で多くのボランティアが必要**で、ボランティアとして行動を起こすこと自体を否定している人はいない。ただ、**本当に被災者の役に立ちたいのか、それとも自己満足なのか、しっかりと自分と向き合ってから行動を起こすこと。**その上で行く決断をするなら、**きっと被災者に不愉快な思いをさせるようなことはしないはず。**それを各自治体や過去の被災者は頻りに訴えている。

被災者の役に立ちたいという気持ちは素晴らしいが、**決して被災者より自分の方が社会的に優秀な人間だと勘違いしないこと。**被災者も災害さえなければ職場で若者を指導して敬意の念で見られていたかもしれないし、採用担当として学生を選ぶ立場だった人だっているかもしれない。そんな人たちが職場を失い、

家を失い、しまいにはボランティアとして入ってきた学生に惨めなおじさんとして接されるというのはだいぶ酷な話だ。

同時に、自己満足でボランティアをすること自体は問題ではないが、**自分が自己満足のために行動しているということを認識**していないと、感謝されないことや想定していたものと違うといったことがあった時に不要なストレスが生まれる。そのストレスが、被災者とのトラブルにつながる。

逆にいえば、**事前にしっかり情報を集めてしっかり準備して、こうした注意点をしっかり踏まえているのであれば、やはりボランティアは今後とても大きな役割を果たしていく**と思う。長くて短い人生の中で、2011年のこの大震災の時、自分は何をやっていたのか。10年後の自分を、50年後の日本を、考えた時に自分は今何をすべきなのか。

もし自分が会社員なら、間違いなくいつも通りの仕事を一生懸命するだろう。もし自分が受験生なら、間違いなくいつも通りの勉強を一生懸命するだろう。数年後の日本経済を考えた時に、ボランティアとして無給で時間とエネルギーを使うよりも、その方が圧倒的に社会のためであり被災者のためにもなるはず。だからボランティアに行く人が特別すごいわけでも偉いわけでもない。

ただ、現地の方と話してわかったことは、希望を感じられる何かが必要だということ。純粋な正義感だけでなく同情や自己満で行動する人もいるだろうし、それを批判する人もいるかと思う。でも、この世界には困っている他人に同情もできずに持ち主のいなくなった民家で物を盗む人がいる。この世界にはどうすれば自分の人生に満足できるのか分からずひたすら他人の悪口を探している人がいる。この世界がそんな人たちばかりだと思ってしまうくらいなら、**動機が何であれボランティアとして自分の安定した生活から飛び出そうとしている人**たちを、心の底から応援したい。

<物資支援について>

供給物資や分配状況に多くの課題があることは一定の事実であると言わざるをえないが、支援物資が集まりすぎて要らない、と現地の人たちが思っているということではない。そもそも30m以上高台にある女川町の病院の駐車場にあった車も全て流されたことから想像できる通り、支援物資を他の避難所や個人宅に届けたいと思っても、運ぶための車もガソリンもない。家が流されてなくなってしまった方が少なくないので、例え欲しいを思っていたとしても衣類や寝袋といった日々消費されていくものではないものを余分に受け取る余裕がない。そして多くの人が集まっていること、保管場所があること、信頼がおけること

といった条件を考えると、支援物資を運ぶ大型トラックは公的な施設に積荷を託す他ないのが現状といえる。



<募金について>

震災が起きて間もなく、赤十字社が受け付け体制を整える前から民間の各種団体が義援金の募集を呼び掛けていた。1週目、2週目とテレビやインターネット、そして街頭での呼びかけに応じて多くの人が寄付した。3週間で集まった金額は7000億円。現地が困ることになるかもしれない物資支援やボランティアよりも、被災者のために義援金を贈ることが求められている、と被災から3週間一貫して唱えられていた。

それはそれで正しい誘導だと思う一方で、そうした義援金を主体とした支援の限界も見え始めている。義援金を利用した詐欺事件が相次いだこともあり、東京を中心に全国の個人レベルの義援金収集への協力が次第にペースを落としているのが感じられる。被災から3週間以上が経ち、既に十分払ったという意識も当然あるだろう。寄付による支援では自分が直接被災者のために貢献できていることが実感できないまま、終わりの見えない支援需要に人々は若干の支援疲れを感じてきているようにも思える。この震災の規模を考えると、そうした臨時的な資金収集だけでなく、増税も含めて長期にわたって安定的に資金を収集していく態勢作りが求められている。

<自衛隊の活動について>



救助活動をはじめ震災後の被災地を支援する仕組みとして最も注目されているのは自衛隊といっても過言ではないだろう。阪神淡路大震災の時には法制度上のしがらみから、自衛隊が出動するまでに1週間近くかかった。その教訓からか、防衛庁は防衛省となり内閣府の判断を待つことなく出動命令が出せるようになった他、県の要請からでも周辺地域の部隊が自主判断で出動することができるようになっている。

現段階で10万人を超える自衛隊員が派遣されているが、現地の人手不足から給水やニーズの聞き取り調査といった作業も手掛けている。被災者の方で職を失い今後の生活が不安な方も多い中で、仕事内容によっては被災者の方に担ってもらうといった工夫も求められている。過酷な作業を続ける隊員の方々に休養を取っていただきたいという趣旨と、作業の人件費が現地の被災者に支払われるという公共事業の二つの目的を満たすことができるのではとのことで、現地の自治体を中心にそうした動きが出始めている。

震災当日の夜、南三陸町志津川の高校では多くの避難者が寒さと空腹に苦しんでいた。その中にいた消防隊員が本部のベイサイドアリーナに無線で支援を要請したものの、本部でも不足品ばかりで応じられないという答えだった。この無線のやり取りを傍受した自衛隊がヘリコプターを派遣し、救援にあつたというエピソードもある。放射能漏れが問題となった当初から福島原発で作業に従事している化学部隊の隊員も、その任務を与えられたことを誇りに思うとして、進んで現地に赴いている。その隊員の一人に胸中を訊ねてみると、その仕事を任せられるのは日本の中で自分たちしかいないという責任感と使命感があるとのことだった。



<海外の反応について>

福島原発への対応に厳しい評価が目立つものの、被災者の冷静な行動や行政の対応、そして日本全国の被災地への支援ムードが国際社会の中で非常に高い評価を得ている。同時に世界中の国々が日本の被災に思いを寄せ、少しでも力になりたいと様々な支援を申し出ている。こうした国家レベルに限らず、個人レベルでも各業界の著名人らが寄付やメッセージという形でアクションを起こしている。

こうした海外の反応を、日本のメディアも頻繁に取り上げており、被災地の方の話題にもよくあがっている。米軍のヘリコプターが救助に来た、イスラエルの医療チームに診察してもらった、大好きな台湾のミュージシャンがメッセージを出した、アフガニスタンまで義援金を贈ってくれた、などなど自身が直接受けたわけではない遥か遠くの行為も、大きな励みになっているようだった。

こうした非常事態であるにもかかわらず日本人は謙虚に冷静に行動していることが海外から評価されているということを誇りに感じる方も少なくない。そうした高評価を失いたくないという心理が、こうした社会を維持していこうとする意欲にも大いに結びついているように感じた。



文責：東 桂太